

『Q & A 資本論』(赤本)学習会・資料

資料1 『資本論』第一部の構成と、「赤本」の「Q」

序言	「はじめに」	Q 6、28
第二版あとがき	Q 28	
フランス語版への序言	Q 28	
第一篇 商品と貨幣	第一分冊 65 ～ 254	ページ
第一章 商 品	Q 2、6、16、27	
第二章 交換過程		
第三章 貨幣または商品流通		
第二篇 貨幣の資本への転化	第二分冊 255 ～ 308	ページ
第四章 貨幣の資本への転化	Q 7	
第三篇 絶対的剰余価値の生産	第二分冊 309 ～ 551	ページ
第五章 労働過程と価値増殖過程	Q 7、8	
第六章 不変資本と可変資本		
第七章 剰余価値率		
第八章 労働日	Q 9、10、11、13	
第九章 剰余価値の率と総量		
第四篇 相対的剰余価値の生産	第三分冊 553 ～ 884	ページ
第一〇章 相対的剰余価値の概念	Q 15	
第十一章 協 業	Q 15、16	
第十二章 分業とマニユファクチュア	Q 15、16	
第十三章 機械と大工業	Q 15、16、17、18、19、20	
第五篇 絶対的および相対的剰余価値の生産	第三分冊 885 ～ 928	ページ
第六編 労賃	第三分冊 929 ～ 980	ページ
第七篇 資本の蓄積過程	第四分冊 981 ～ 1352	ページ
第二一章 単純再生産		
第二二章 剰余価値の資本への転化	Q 2、16	
第二三章 資本主義的蓄積の一般的法則	Q 22	
第二四章 いわゆる本源的蓄積	Q 24、25、26	
第二五章 近代的植民理論		

資料2『資本論』のなかの未来社会論

2-1 「自由な人々の連合体」

「共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覺的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体」(①140ページ)

2-2 社会の主役は「結合した(アソツイールテ)生産者たち」

「結合した(アソツイールテ)労働の生産様式」(⑩1096ページ)

「社会化された人間、結合した(アソツイールテ)生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝」を「合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおく」社会(⑫1460ページ)

2-3 「各個人の完全で自由な発展を基本原理」とする社会

「使用価値と享受ではなく、交換価値とその増殖とが、彼の推進的動機である。価値増殖の狂信者として、彼は容赦なく人類を強制して、生産のために生産させ、したがって社会的生産諸力を発展させ、そしてまた、各個人の完全で自由な発展を基本原理とするより高度な社会形態の唯一の現実的土台となりうる物質的生産諸条件を創造させる」(④1030ページ)

2

2-4 「自由の国」¹⁾「必然の国」

「1、自由の国は、事実、窮迫と外的な目的適合性によって規定される労働が存在しなくなるところで、はじめて始まる。したがってそれは、当然に、本来の物質的生産の領域の彼岸にある。

2、未開の人が、自分の諸欲求を満たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないように、文明人もそうしなければならない、しかも、すべての社会諸形態において、あらゆるすべての生産諸様式のもとで、彼は、そうした格闘をしなければならぬ。彼の発達とともに、諸欲求が拡大するから、自然的必然性のこの国は拡大する。しかし同時に、この諸欲求を満たす生産諸力も拡大する。

3、この領域における自由は、ただ、社会化された人間、結合した(アソツイールテ)生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって——盲目的な支配力としてのそれによって——支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうこと、この点にだ

けありうる。

4、しかしそれでも、これはまだ依然として必然性の国である。この国の彼岸において、それ自体が目的であるとされる人間の力の発達が、真の自由の国が——といっても、それはただ、自己の基礎としての右の必然性の国の上へのみ開花することができるのであるが——始まる。労働日の短縮が根本条件である」(⑫1459～60頁)

資料3 フランツィスカ・クーゲルマンの回想から

「終わりにちかいころ、マルクスと私の父がかなり長い散歩をしたあと、二人の間に決裂がおこり、ついに二度ともどおりになりませんでした。……父はなんとかマルクスを説きつけて政治的宣伝活動から手をひき、なによりも『資本論』第三巻を書くようにさせようとしたらしいのです。父の見るところでは、マルクスは貴重な時間を無駄にしているだけでなく、彼には組織者としての才能がないというのです。……はるかに若い友人からこんなことを言われては、マルクスたるものがまんがなかったのです。それは彼には自分の自由にたいする干渉とみえたのでした。そんなことがあったので、手紙のやりとりもやめました。……私の父は、そののちも以前と同様に尊敬するこの友人と離別した苦痛にうちかつことができませんでしたが、しかし二度とあゆみようとはしませんでした。父の固く信じていたことを撤回するわけにはいかなかったのです」(『モールと将軍』大月書店、290～291頁)

資料4 工場立法——経済運動から政治運動への発展

「労働者階級が階級として支配階級に対抗し支配階級を外部的な圧力によって屈服させようとする運動は、すべて政治運動です。たとえば、ある一つの工場とかあるいはまたある一つの事業でストライキなどによって個々の資本家から労働時間の制限を勝ち取ろうとする試みは、純粹に経済的な運動です。これにたいして、八時間労働などの法律を強要することは、政治運動なのです。このようにして、どこでも労働者たちの個別的な経済運動から政治運動が生まれてくるのです。すなわち、一般的な形態において、つまり、一般的な社会的な強制力をもつ形態において、自分の利益を実現するための、階級の運動が生まれてくるのです」(1871年11月23日、マルクスからボルテへの手紙、古典選書『マルクス・エンゲルス書簡選集・中』112頁)

資料5 インタナショナルへの「指示」(1866年)から

5-1、「三 労働日の制限」

「労働日の制限は、それなしには、いつそうすんだ改善や解放の試みがすべて失敗に終わらざるをえない先決条件である。」

それは、労働者階級、すなわち各国民中の多数者の健康と体力を回復するためにも、またこの労働者階級に、知的発達をとげ、社交や社会的・政治的活動にたずさわる可能性を保障するためにも、ぜひとも必要である。

われわれは労働日の法定の限度として八時間労働を提案する。このような制限は、アメリカ合衆国の労働者が全国的に要求しているものであつて、本大会の決議はそれを全世界の労働者階級の共通の綱領とするであらう。

……女性については、夜間労働はいつさい嚴重に禁止されなければならないし、また両性関係の礼儀を傷つけたり、女性の身体に有毒な作用やその他の有害な影響を及ぼすような作業も、いつさい嚴重に禁止されなければならない。

……十七歳まで（十七歳をふくむ）の者を夜間労働や健康に有害なあらゆる職業に使用することは、いつさい法律によって嚴重に禁止されなければならない」

5-2、「五 協同組合労働」

「（イ）われわれは、協同組合運動が、階級敵対に基礎をおく現在の社会を改造する諸力のひとつであることを認める。この運動の大きな功績は、資本にたいする労働の隷属にもとづく、窮乏を生みだす現在の専制的制度を、自由で平等な生産者の連合社会という、福祉をもたらす共和的制度とおきかえることが可能だということを、実地に証明する点にある。」

（ロ）しかし、協同組合制度が、個々の賃金奴隷の個人的な努力によってつくりだせる程度の零細な形態に限られるかぎり、それは資本主義社会を改造することはけつしてできないであらう。社会的生産を自由な協同組合労働の巨大な、調和ある一体系に転化するためには、全般的な社会的変化、社会の全般的条件の変化が必要である。この変化は、社会の組織された力、すなわち国家権力を、資本家と地主の手から生産者自身の手に移す以外の方法では、けつして実現することはできない。

（ハ）われわれは労働者に、協同組合商店よりは、むしろ協同組合生産にたずさわることを勧める。前者は現在の経済制度の表面にふれるだけであるが、後者はこの制度の土台を攻撃するのである」

5-3、「六 労働組合。その過去、現在、未来」

「労働組合は、資本にたいする局地的な、当面の闘争にあまりにも没頭しきっていて、賃金奴隷制そのものに反対して行動する自分の力をまだ十分に理解していない。……

（「その未来」として）いまや労働組合は、資本の奸策に対抗して行動するという当面の任務以外に、労働者階級の完全な解放という広大な目的のために、労働者階級の組織化の中心として意識的に行動することを学ばなければならない」

5―4、「七 直接税と間接税」

「（イ）課税の形態をどんなに変えても、労働と資本の関係にいくぶんでも重要な変化をもたらすことはできない。

（ロ）にもかかわらず、二つの課税制度のうち一つを選ぶべきだとすれば、われわれは間接税を全廃して、全般的に直接税とおきかえることを勧告する。

……間接税では、個人が国家に支払う額がどれだけかということとは、その個人に隠されているのに、直接税はあからさまで、ごまかしがなく、どんな頭のわるい人間にも誤解のおこりようがないこと。だから、直接税は各人を刺激して、統治者を監督しようという気持ちにさせるが、間接税は自治への志向をいっさいおしつぶす」

（マルクス『個々の問題についての暫定中央評議会代議員への指示』、1866年8月末に執筆、古典選書『インタナショナル』51～59頁）

資料6 生産力について

6―1、生産力は、有目的具体的労働の生産力

「生産力は、もちろんつねに、有目的具体的労働の生産力であり、実際、ただ、所定の時間内における合目的生産的活動の作用度だけを規定する」（①85頁）

6―2、労働の生産力が資本の生産力として現われる

「（資本主義的協業では労働者が）労働過程にはいるとともに、彼らは資本に合体される。協業する者としては、活動する一有機体の諸分枝としては、彼ら自身は資本の一つの特殊な存在様式であるにすぎない。それだから、労働者が社会的労働者として展開する生産力は、資本の生産力である。……この労働の社会的生産力は、資本が生まれながらにしてもついている生産力として、資本の内在的な生産力として、現われる」（③588～9頁）

6―3、資本主義制度では、生産力の増大は、労働者を犠牲にして行われる

「資本主義制度の内部では、労働の社会的生産力を高めるいっさいの方法は、個々の労働者

働者を犠牲にして行われるのであり、生産を發展させるいっさいの手段は、生産者の支配と搾取との手段に転化し、労働者を部分人間へと切り縮め、彼を機械の付属物へとおとしめ、彼の労働苦によつて労働の内容を破壊し、科学が自立的力能として労働過程に合体される程度に应じて、労働過程の精神的力能を労働者から疎外するのであり、またこれらの方法・手段は、彼の労働条件をゆがめ、労働過程のあいだはあまりに細かいところまでくだわる悪意に満ちた専制支配のもとに彼を服従させ、彼の生活時間を労働時間に転化させ、彼の妻子を資本のジャガノートの車輪のもとに投げ入れる」(④1125～6頁)

6―4、資本家は、生産のための生産を強制し、未来社会の物質的諸条件を創造する

「使用価値と享受ではなく、交換価値とその増殖とが、彼(資本家)の推進的動機である。価値増殖の狂信者として、彼は容赦なく人類を強制して、生産のために生産させ、しがたつて社会的生産諸力を發展させ、そしてまた、各個人の完全で自由な發展を基本原理とするより高度な社会形態の唯一の現実的土台となりうる物質的生産諸条件を創造させる」(④1030頁)

6―5、一定の労働の生産性なしには、自由に処分できる時間はない

「一定程度の労働の生産性なしには、労働者にとってこのように自由に処分できる時間はないのであり、そしてこのような余分な時間がなければ、剰余労働もなく、したがって資本家もなく、しかもまた奴隷所有者もなく、封建貴族もなく、ひとこと言えば大所有者階級はないのである」(③891頁)

6―6、未来社会における生産力の新しい質(「青本」より)

「ここで、生産力についてそもそもから考えてみたいと思います。

まず生産力そのものは、未来社会をつくる物質的な土台になります。……さきほど、『人間の自由で全面的な發展』のための根本的条件は、労働時間の抜本的短縮だということをお話ししました。労働時間の抜本的短縮を実現しようとすれば、高度な生産力は不可欠の条件となります。さらにそれは、できるだけ短い労働時間で、人間にとって必要な物の豊富さをつくりだす条件となるでしょう。發達した資本主義国では、未来社会の物質的な土台となる高度な生産力がすぐにつくられていて、これを生かして前に進むことができることを、まず強調したいと思います。

そのうえで同時に強調したいのは、未来社会——社会主義・共産主義社会は、資本主義社会のもとでつくられた高度な生産力を、ただ引き継ぐのではなく——『利潤第一主義』に突き動かされて『生産のための生産』に突き進んだ資本主義社会のような、生産力の無

限の量的発展をめざすものでなく——、新しい質で発展させるものとなるだろうということです。

そもそも生産力とは何かを考えますと、生産力とは、本来は、人間が自然に働きかけて、人間にとって役に立つものを生み出すための人間的な能力です。本来、生産力というのは『労働の生産力』なのです（①85頁）。ところが、資本主義社会の下では、『労働の生産力』が、資本の支配のもとに置かれてしまつて、あたかも『資本の生産力』であるかのようにならわれます。そして搾取を強化したり、自然を破壊する力をふるつてくる。未来社会に進むことによつて、生産力は『資本の生産力』から抜け出して、本来の人間的能力としての『労働の生産力』の姿を取り戻すことになる。これが私たちの展望です。

私は、未来社会における生産力は、次のような豊かな新しい質をもつものとして発展させられるだろうと考えます。……

第一は、生産力が、『自由な時間』をもつ人間によつて担われることになるということです。つまり生産力の主体となる人間が変わります。マルクスは、『資本論草稿』のなかで、『自由に処分できる時間』を持つ人間の労働時間は、労働するだけの人間の労働時間よりもはるかに高度な質をもつと言っています。また『自由な時間』の増大は、その持ち手をこれまでとは違った主体に転化し、最大の生産力となるという言い方もしています。『自由な時間』を持つ人間——全面的に発達した人間によつて担われる生産力は、より高い質をもつことになるでしょう。それは人間にとつて必要な物の豊富さを、より短い時間で生産することを可能にするでしょう。

第二は、**労働者の生活向上と調和した質をもつ**ことになるだろうということです。『資本の生産力』のもとでは、生産力の発展は、一方で社会の発展をつくりだしますが、つねに労働者の搾取の強化の手段ともされます。……未来社会に進むことによつて、『資本の生産力』によつてもたらされている、生産力の労働に対する敵対的な性格はなくなるでしょう。つまり労働者の生活の向上と調和した質をもつことになることが展望できるのではないのでしょうか。

第三は、**環境保全と両立する質をもつ**ことになるだろうということです。さきほど未来社会に進むことで資本主義固有の『大量生産・大量消費・大量廃棄』などの浪費がなくなるという話をしました。浪費がなくなることは生産力の質を豊かなものへと大きく高めることになるでしょう。その量がたとえ少なくなつても、質を含めた生産力の全体はより豊かなものへと発展するでしょう。また、さきほど『あとの祭り』の経済から抜け出すという話をしました。社会的浪費を一掃し、『あとの祭り』の経済から抜け出して、『祭り』の前に『社会的理性』が働くような社会に発展することで、生産力は環境保全と両立する質をもつようになるでしょう」（111～114頁）

資料7 労働者の集団が力を合わせて生産を行う

「自動化工場のピンダロス〔ギリシャの抒情詩人〕であるユア博士は、この自動化工場を、一方では、『一つの中心力（原動力）によって間断なく作動させられる一つの生産的機械体系を、熟練と勤勉さをもつて担当する成年・未成年のさまざまな等級の労働者の協業』であると記述し、他方では、『一つの同じ対象を生産するために絶えず協調して働く無数の機械的器官および自己意識のある器官から構成され、その結果、これらすべての器官が自動で動く一つの動力に従属している一つの巨大な自動装置』であると記述している。

（引用者改行）これらの二つの表現は、決して同じではない。第一の表現では、結合された全体労働者または社会的労働体が支配的な主体として現われ、機械的自動装置は客体として現われている。第二の表現では、自動装置そのものが主体であって、労働者はただ意識のある諸器官として自動装置の意識のない諸器官に付属させられているだけで、後者とともに中心的動力に従属させられている。第一の表現は、大規模な機械のありとあらゆる使用にあてはまり、第二の表現は、機械の資本主義的使用を、したがって近代工場制度を特徴づけている」（③735～6頁）

資料8 「新しい社会の形成要素」と「古い社会の変革契機」

「労働者階級の肉体的および精神的な保護手段として工場立法の一般化が不可避免的になると、他方で、それは、すでに略述したように、矮小な規模の分散した労働過程から大きな社会的規模での結合された労働過程への転化を、したがって資本の集中と工場体制の排他的支配とを一般化し、かつ促進する《——新しい社会の形成要素》。工場立法の一般化は、資本の支配をなお部分的に背後におおい隠しているすべての古い諸形態および過渡的諸形態を破壊して、資本の直接的なむき出しの支配に置き換える。したがってそれは、資本の支配にたいする直接的な闘争をも一般化する《——古い社会の変革契機》。工場立法の一般化は、個々の作業場においては、斉一性、規則正しき、秩序、および節約を強要するが《——新しい社会の形成要素》、他方では、労働日の制限と規制が技術に押し付ける強大な刺激によって、全体として資本主義的生産の無政府性と破局、労働の強度、そして機械と労働者との競争を増大させる《——古い社会の変革契機》。工場立法の一般化は、小経営および家内労働の領域とともに、『過剰人口』の最後の避難所を破壊し、そしてそれとともに全社会機構の従来の安全弁を破壊する《——古い社会の変革契機》。工場立法の一般化は、生産過程の物質的諸条件および社会的結合とともに《——新しい社会の形成要素》、生産過程の

資本主義的形態の諸矛盾と諸敵対とを《——古い社会の变革契機》、それゆえ同時に、新しい社会の形成要素と古い社会の变革契機とを成熟させる」(③877頁)

資料9 人間は労働を媒介して、自然との物質代謝を行う

「労働は、まず第一に、……人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である」(②310頁)

「労働過程は、諸使用価値を生産するための合目的活動であり、人間の欲求を満たす自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永遠の自然的条件であり、したがってこの生活のどの形態からも独立しており、むしろ人間生活のすべての社会形態に等しく共通なものである」(②320頁)

資料10 環境問題についての『資本論』の言及

10-1、資本主義的農業と物質代謝の攪乱、未来社会における体系的再建

「1、資本主義的生産は、それが大中心地に堆積させる都市人口がますます優勢になるに従って、一方では、社会の歴史的原始力を蓄積するが、他方では、人間と土地とのあいだの物質代謝を、すなわち、人間により食料および衣料の形態で消費された土地成分の土地への回帰を、したがって持続的な土地豊度の永久的自然条件を攪乱する。こうしてこの資本主義的生産は、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活とを、同時に破壊する。」

2、しかしそれは同時に、あの物質代謝の単に自然発生的に生じた諸状態を破壊することを通じて、その物質代謝を、社会的生産の規制的法則として、また完全な人間の発展に適合した形態において、体系的に再建することを強制する。……

3、資本主義的農業のあらゆる進歩は、単に労働者から略奪する技術における進歩であるだけでなく、同時に土地から略奪する技術における進歩でもあり、一定期間にわたって土地の豊度を増大させるためのあらゆる進歩は、同時に、この豊度の持続的源泉を破壊するための進歩である。……それゆえ資本主義的生産は、すべての富の源泉すなわち土地および労働者を同時に破壊することによってのみ社会的生産過程の技術および結合を発展させる」(③880～882頁)

10-2、人間は地球の所有者ではない。これを改良して次の世代に遺さなければならない

「より高度の経済的社会構成体（社会主義・共産主義社会——引用者）の立場からは、各個人による地球の私的所有は、ある人間による他の人間の私的所有と同じくまったくばか

げたものとして現われるであろう。一社会全体でさえ、一国民でさえ、それどころか同時代のすべての社会を一まとめにしたものでさえ、大地の所有者ではない。それらは大地の占有者、土地の用益者であるにすぎないのであり、“よき家父長たち”として、これを改良して次の世代に遺さなければならない”(⑩ 1384頁)

資料11『賃金、価格および利潤』から

「近代産業の発展そのものは、労働者に不利で資本家に有利な情勢を累進的に生みださざるをえず、またその結果、資本主義的生産の一般的傾向は、賃金の平均水準を高めるのではなく、低める、すなわち労働の価値を多かれ少なかれその最低限度におし下げるものである。……だからといって、労働者階級は資本の侵害にたいする抵抗を断念し、かれらの状態の一時的改善のためにそのときどきの機会をもっとも有利に利用するくわだてを放棄すべきだ、などと言っていることになるであろうか？ もしそんなことをしたら、彼らはみな一様に救いようのない敗残者の群れに墮してしまふであろう。……もし彼らが資本との日常闘争において臆病にも退却するならば、彼らはきつと、もつと大きな運動をおこすための資格をみずから失うことになるであろう。」

それと同時に、そしてこの賃金制度にふくまれている一般的隷属状態のことはまったく別として、労働者階級はこれらの日常闘争の究極の効果を過大視してはならない。彼らは、もろもろの結果とたたかっているだけであって、それらの結果の原因とたたかっているのではないということ、下降運動に定稿しているだけであって、その運動の方向をかえてい
るのではないということ、さらには、「一時しのぎの緩和剤を用いているだけであって、病
気を治しているのではないということ、これらを忘れてはならない。……現在の制度は、
彼らにあらゆる困苦をおしつけるが、それと同時に、それが社会の経済的改造に必要な物
質的諸条件と社会的諸形態をも生みだすものであることを、彼らは理解すべきである。彼
らは、『公正な一日の労働にたいして公正な一日の賃金を！』という保守的な標語のかわり
に、『賃金制度の廃止！』という革命的なスローガンを彼らの旗に書きしるすべきである」

(古典選書、183〜85頁)